

観想の時

——長歌体詩篇二十一——

北原白秋

青空文庫

黎明の不尽

天地あめつち ひらの闢けしはじめ、成り成れる不尽たかねの高嶺は白妙の奇しき
 高嶺、駿河甲斐ふたくに二国かけて八面やおもてに裾張りひろげ、裾広に根ざ
 し固めて、常久に雪かつぐ峰、かくそそり聳やきぬれば、厳いかしく
 も正たゞしき容かたち、譬たとへふるに物なき姿、いにしへもかくや神さび神なが
 ら今に古りけむ。たまたまに我や旅行き、行きなづみ振さけ見れ
 ば、妻と来てつつしみ仰げば、あなかしこ照る日もわかず、暮れ
 ゆけば雲巻き蔽ひ、霹はた、がみ靨がみはためくさへに、稲光青さをの火柱、火
 ばしらの飛ぶ火のただち、また、とどろ雹ぞ飛びたる。御殿場の

ここの駅路うまやじ、一夜寝て午夜ごやふけぬれば、まだ深き戸外このもの闇に、
早や目ざめ獵犬かりいぬが群きほ、勢きほひ起き鎖曳おどきわき、跳り立ち啼なき立ち
急せくに、朝獵の公達か、あな、ひとしきり飛び連れ下りる騒さうぞき
の、さて出立でたつらむ。けたたましく自動車の鳴り爆はぜる音、咽喉のど
太ぶとの唸り笛さへ凝り霜の夜凝りに冴よごえて、はた、ましぐらに何処いづく
へか駈け去りぬ。底冷そこびえの戸の隙間風、さるにても明け近からし。
目のさめて明告あけつげどり鳥の息長に啼き呼ばふ声、そことなく応こたふる声
の裾野原揺りどよもすに、おのづ覚め我は在りけり、目はさめて
我もありけり。つくづくと首延のし見れば、こちごちの濃霧こぎりのなび
き、溪の森、端山の小巖こひだ黒ぐるとまだ気けぶかきに、びようびよう
と猛ける遠吠、をりからの暁あかつきやみ闇やみを続け射つ速弾はやだまの音。ただ

さへも益良夫ごころ溢れ揺り抑へもあへぬを、見透かせば渦巻く
 霧の瑠璃雲の漂ひが上、数かぎりなき糠星の瓔珞うちの中、あなあは
 れ不尽の高嶺ぞ、白妙の不尽の高嶺ぞ、今し今、一きは清き紫の
 朝よそほひに出で立ち立てり。夢か、こは、まことなりけり。夢
 ならず、現うつなりけり。起きよ起きよ。まことこれ日の本の不尽、
 木花咲耶姫の神、神しづまりに鎮まらす不尽の御嶽みたけぞ、見よ目に
 見えて近ぢかと明け初むるなれ。起きよとて妻揺りたたき、目ざ
 めよとまた呼び覚まし、口漱ぎ、さて、身をきよめ、さむぎむと
 袂合はし、しみじみと二人い寄り、ひたすらにかくて見恍ほれぬ。
 時ありぬ。やや時経れば、ほのぼのとして薄明る山際やまぎはの色、黎し
ののめ明の薄樺いろに焼け明るその静けさに、日出づる前か、明鴉か

をかをと二羽連れだちて羽風切る、その羽裏いよよ染みたり。は
 たはたと山鳩もまた二羽競ひ行く。観る人も妻とし見れば飛ぶ鳥
 も連るるものかも、うれしやと妻は見て云ふ、我もまた微笑みて
 見つ。さるからに、薄紅き蓮華の不尽の隈ぐまの澄み明りゆく立
 姿、頂いたゞきの辺は更にも紅あかく、つや紅く光り出でたれ。よく見ればそ
 の空高く、かすかにも靡くものあり。高うして吹雪すらしか、か
 すかにも雪煙立ち、その煙絶えずなびけり。いよいよに紅く紅く、
 ひようひようと立ちのぼる雪の焰あまぢの天路さしいよよ尽きせね、消
 えてつづき、消えてつづけり。あなあはれ、かのいつくしき、こ
 のかうかうしき。眺むれば見れども飽かず、言ことにさへ筆にさへ出
 ね。あなかしこ、不尽の高嶺は日の本の鎮めの高嶺、神くすながら奇

しき高嶺、この高嶺まれに仰ぎてこの朝あしたあらた新あらたにぞ見て、この我
 や、ただこの妻と、ただ得も云へず涙しながる。

遠山脈の歌

上つ毛かむらの加牟良かむらの北あまに天あまそそる妙義荒船、遥はろばろと眺みめに出づれ
 ば、この日暮やまなみふりさけ見れば、いや遠し、遠やまなみき山脈、いや高し
 高やまなみき山脈、いやが上へに空へに続きへて、いや寒ひだく襷ひだを重ひだねて、幾重
 ね、幾たたなはは、末すゑ遂すゑに雲居すゑにぞ入すゑる。かりそめの旅にはあれど、夕
 されば内にも堪へはず、外とに出とでてひとりありけり。向むかひ吹く川の

瀨の風、川風の吹きこの凍えに我が向ひ迫る高崖、遙か見る北の山
 脈。冬も早や絹のつや雲、卷雲の卷きのなびきに、氷凝り雲層かさぐ
 雲もの群、重ね雲、寂び金の雲、下明り雲あかともわかず、薄ぎらひ
 山ともわかず、たださへも現うつならぬを、たださへも果てしわかぬ
 を、日の射すか末広の虹幾すぢか透きて落せり。かうがうしその
 薄光、寂び寂びしプラチナのすぢ、濃き淡き峰の畳みに、引きち
 がふ山の小襞に、また雨と和なごみ注げり、柔かき金色の霧。あな遠
 し遠き山脈、あな高し高き山脈、立ちとまり見れども消えず、目
 ふたぎて傷めど尽きず、目翳まかげして遙けみ見れば、いや寂し薄き
 陽ひの虹、また見ればさらに彼方に、いや高き連山つらやまの雪、いや遠
 き連山つらやまの雪、ひえびえと、つきつきと、続きつづきて耀かゞやきいで

ぬ。

竹と曼珠沙華

わが門かどの竹の林に、曼珠沙華赤く咲きたり。竹の根の一つ一つに、この華はなや六つ七つづつ、日に増しに数かさみゆく。怪しくも赤き卷髭、髭細の蓮華はななす華、咲き盛るその華見れば、おのづから秋も澄みけり、いよいよに風も寂さびけり。隣り寺、寺の古墓、日あたりは未まだも暑けど、墓掃くとかがむ影すら、阿闍汲むと寄るすらも無し。あなあはれ、摩訶曼珠沙華、出で入るとひとり眺

めて、時をりは妻と眺めて、昨日きのふゆかいよよ殖ふえしと、まだ今日
 も赤しとぞ見る。孟宗のしだれ笹ゆゑ、陽ひは射させどいぶせき簍を
 常くぐり我は在りけり。わびしけど遊び馴れけり。山住の心安さ
 は簍越しに浪の音聴き、里囃子うれしとも聴け、施餓鬼過ぎ流石
 さびしく、人訪はぬ今は堪へえね、また出でて竹の根見れば曼珠
 沙華赤く赤きに、ちらと向き、釣眼つりめ野狐、うしろ向き尖り口して、
 小簍吹き、吹き吹く風に、日の暮に、あな、飛び飛びて消えつつ
 失せぬ。

竹の林の歌

雨あとの竹の林に、夕あかりかがよふ見れば、その竹の湿しめる根
ごとに、何か散り、深く光れり。その節のひとつひとつに、何か
また溜り光れり。其笹のさみどりの葉に、何かまた揺れて光れり。
金こんじき色のその光るもの、こまごまと目に染しみるもの、雨ふりてあ
かれるのちは、とりわけて揺れてうつくし、寂しくて見てゐるき
ははいよいよに消えてうつくし。揺るともただ見て居をらむ、消
ゆるともまた見て居らむ、堪へ堪へて日の暮るるまで、なほなほ
に寂しがりつつ。わが宿の竹の林の夕あかり、裏山松の松風も聴
けば親しさ。

蝟の歌

かなかな
 蝟の啼き連るるなり。二つなり。啼き連るるなり。その二つ啼
 きやめばまた、こなたより啼きしきるなり。ただ一つ啼きしきる
 なり。孟宗の片日射なり。山松の遠日射なり。かなたには輝りき
 らふ海、こなたにはわたる山霧、山ぎりに山の施餓鬼のほとほと
 に果つる頃なり。こんじき 金色に秋の日射の斜なし澄みとほる中、かなかな 蝟は
 啼きしきるなり。せせ 急急きて啼き刻むなり。二つ啼き、一つ啼き、
 また、はや こもごもに啼き速むなり。

蝸が二つ啼きまた一つがこもごもに

湯どころの秋

ねもごろの日のあたりかも。そことなき湯のけぶりかも。日の
 あたる原のかたへに櫛立ち、櫛の傍に斑まだらうし牛ひとり居りけり。
 安らかに繋がれてけり。山峡の湯どころの秋。出でて見れば、下の
 小橋を杖つきて渡る子もあり。垂稻の黄ばむ田づらはをりふしに
 雀むれ立ち、道ぞひの茅屋の庭に白菊の盛り見せたる、胡麻と栗
 並べ干したる暇いとまある心に見ればなかなか今日は安けし。向つべ

に日のかげる山、なほ明く温かき山、その空の白き綿雲、ちろち
 ろと渡る禽とりさへなかなかにあはれとも見れ。妻と来て、二人来て、
 七日まり住み馴れてのち、やうやうに紅葉色もみぢづく遠をちこち近のこの眺
 めなる。あなあはれ、ねもごろの日のあたりかも。そことなき湯
 のけぶりかも。日のおたる原のかたへに櫛立ち、櫛のかげに斑牛
 ひとり居りけり。繋がれてただねんねんと草食はみにけり。

秋山の歌

秋山のなぞへの薄すすきひとつらね揺りかがやけり。秋山の名も無き

山の草山の山の端^{はすすき}薄、その穂の薄揺りかがやけり。この夕、出
 でて見て、岨^{そば}ゆ見て、丸木橋妻と渡りて、また見ればまだかがや
 けり。その薄刈る人もあり。また負ひて下り来るもあり。下りて
 来て、行きすぎざまにさわさわと背^{そびら}見せゆく、さわさわの背^{そびら}の薄
 またかがやけり。雲白くうかべる峽の日^{ひだむろ}屯の空^{そらあひ}間の中、こま
 ごまと飛べる羽虫も、よく見れば一つ一つに命あり、舞ひ立ち光
 る。閑^{しづ}かなり、ただ安らなり。まだ深き日のあたりなる。暑から
 ず、寒くしもなく、まだ温^{ぬく}き日のかげりなる。湯どころのうしろ
 の山の秋山のその柔かき草山のこのもかのもにさわさわと音する
 薄、穂薄の、今日来て見れば、揺りかがやけり。あなあはれ、我
 も見て、妻も出て、二人ながむるさわさわ薄、そのさわさわ薄。

岡の鉾杉

わが宿の岡のなぞへに杉いくつ屯せりけり、せうせうと屯せり
けり。鉾杉のひとむら木立鉾杉の鉾を並べて、この朝明しぐるる
見れば、霧ふかく時雨るる見れば、うち霧らひ、霧立つ空にいや
黒くその秀うかび、いや重く下べ鎮もり、いや古く並び鎮もる、
凡てこれ墨の絵の杉、見るからに寒し厳かし、かうがうし、寂し
崇高し。あなあはれ、岡の鉾杉、をちこちの小竹のむら笹、柿も
みぢ、梅が枝の蔦、とりどりに色に出づれど、神無月すゑの時雨
に濡れ濡れてその葉枯れず、落葉せず、透かず、薄れず、ただ上

べわづか赭^{あか}みて天鷲^{びろうど}絨の焦茶いろすれ、深^{ふか}ぶかと黒くか青く、常
 久に古び鎮^{しづ}もる。寂しくも寂しき姿、堪へ堪へて常立つ心。あな
 あはれ冬の銚杉、海ちかき岡の銚杉、銚杉の渦^{うづ}成す霧に、涯^{はて}知れ
 ぬ海も見わかず、ひさかたの空もえわかね、時をりは渡りの鳥の
 はぐれ鳥^{どり}ちりぢりと落ち、羽^{はね}重^{おも}の一羽鴉も飛びなづみややに來
 て揺る。あなあはれ、雨の銚杉、見てあれば幽^{かす}かに揺れて、ふる
 雨に幽かに揺れて、ただせうせうと音たてにけり。

榧と栗

伝肇寺、でんでうじ 小ちさき古寺、此寺の山の墓場に、かや 榿と栗並び立ちたり。並び立ちともに老いたり。榿の木は栗の木のそば、栗の木は榿のかたへにさびさびて、すでに老いたり。その榿よいつよりか
 老い、この栗よいつよりか立つ。榿と栗さびにさびつれ、なほし
ま未だ花は咲きけり。年ごとに花はつけけり。榿の木はかすかなる
 花、栗の木は露あらはなる花、その榿に小ちさき榿の実、この栗に栗の
 青毬、風吹けば実さへ毬さへまたいつかこぼれこぼれぬ。枯れ枯
 れて土にかへりぬ。見る人も知る人もなし。寺まうで墓まうでび
 と、たまさかに蹲かがみ通れど、誰ひとり振りは仰がず、誰ひとり眼
 にもとめねば、ただ二木ふたき立てるのみなる、榿と栗さびるのみなる。
 あなあはれ、榿と栗の木、落葉する栗も寒けど、常青く立てる榿

の木、冬の日はことに高しよ。栗の木はいよよ透けれど、榧の木はいよよか黒く、薄日射函根の入陽秀いりひほに受けてひとり尖とがれり。いや黒くひとり堪へたり。雨まじり霏ふる日も風まじり雪の飛ぶ夜も、こごしくも凍こごえ立ちたり。親しくも立ちて堪へたり。あなあはれ、老木の二木ふたき、親しくも並ぶ姿の、寂しくも隣り合ふ木の頼り無き二木を見れば涙しながる。

孟宗と月

さわさわと揺るるものあり。午夜ごやふけて揺るるものあり。わが

窓の硝子戸の外そと、真透ますかせば月に影こゝろして凍え雲絶えず走れり。円かなる望月ながら、生なまあを蒼くまく隈する月の、傾かけばいよよ薄へきを、あな寒さむや揺るる竹あり。孟宗の重かさきしだれの重かさなりのその上へに抜けて、ただひとり揺るる秀ほのあり。目か醒めし、夜風か出でし、さわさわと揺れて遊べり。しだれつつ前にうしろに、照りかげり揺れて遊べり。円まじかなる望月ながら生なまあを蒼くまく隈する月の飛び雲の叢むらくも雲らくもが間あひ、ふと洩れて時をり急に明るかと思ふ時なり。目に見えてさわさわさわと、照り浮ぶ孟宗の、あな、一きは強きつき、狐ねび光かりのその月に、さながら生きて踊るかに、近ちかあか明りして勢きほひ舞ふ、かと思れば、また、何か暗く薄うすかげりして、揺ゆらぎ止み、揺ゆらぎ騒さやだ立つ。此夜よさや、夜鳥も啼かず、藪とかげの隣となりの寺もしんし

んと雨戸鎖さしたれ。時として川瀬せの音ねの浪なみの音ねと響ひびき添そふのみ。
 それもただ遠とほし、気疎けうとし。あなあはれ、この夜の山やまに、何なにしらず
 目のさめしもの、我われのみか、揺ゆれそよぐあり。揺ゆれそよぎ、独ひとり
 遊あそぶと、揺ゆれそよぎ、この目の外そとに、また、さわさわと音ね立てて
 る。

冬ふゆの山やま岨さへ

玉たまくしげ函根はなねの山やまは短みづかか日ひのことに短みづかかく、み冬ふゆさり霜しも下おり来き
 れば、午過ひるぎて日ひの目めも知しらず。向むかつべの山やまは明あれど、こなたな

る高山の岨そば、風寒く木の葉ちるのみ。早や早やも土は凝こりて、岩
 角の犬羊齒が下、枯れ枯れの雑木の根ごと、そくそくと氷柱つららさが
 れり。ほきほきと、氷柱搔き折り、かりかりと噛みもて行けば、
 あな冷つめた、つめたかりけり。妻もまた冷つめたよと云ふ。二人ゆく高
 崖の上、何の枝えぞ透きてこまかにつや黒の果みをちらつかす。ふり
 仰ぎ透かし見すれば、高く澄む空の青きにひえびえといそぐ雲あ
 り、また薄く消ゆるものあり。長尾鳥飛びて叫ぶに行きなづみ、
 蹲こいみてあれば、あなさむや、溪裾紅葉銚杉の暗きを出でて、ひ
 と明あかり紅あかく燃えたり。その紅葉淵に映れり。人知らぬ寂びと静け
 さ。その下しもに飛び飛びの岩、岩もまた幽かすけかりけり。冬はなほ幽
 けかりけり。あなあはれ、櫟の枯木、行き行けば見る眼に聳え、

滝落ちてかげり陽ひは迅はやし。あなあはれ、山の端うす薄び陽び。下見しもれば早や
 塔の沢、こちごちに湯の香煙かけりて、ちらちらと揺るる燈ひの見ゆ。
 海見えて漁火いざりつく見ゆ。この岨や馴れし山岨、遠く来し旅にもあ
 らね、さは急ぐ道にもあらず。我がどちや言ことにこそ出でね、今さら
 の連れにもあらねば、ただ二人ほつりほつりと、日の暮はほつり
 ほつりと、また家路さし下くだるのみなり。下るのみなり。

冬の棚田

丘窪の冬の棚田たなだはねもごろにうれしき棚田。寂び寂びて明るき

棚田。たまさかに鶉茶の刈田、小豆いろ、温かきいろ、うち湿るしめ
 珈琲の土。つち下田にはいくつ稲村白金ブラチナの笠めき和め、なご上畑は緑かみばた
 の縞目、わづかにも麦ぞ萌えたる。その畑に動く群禽むらどり、つくづつ
 くと尾羽根振りては、また空へ飛び立ち翔かける。あな冷た群つめの鶉むれ
 鶉い群れ飛べど目にもとまらず。いづこにか鶉ひよは叫べど、風騒ぐ
 けはひも聴かず。ただ低き日あたりの中、茅屋根の物静かなる、
 紫に寂び沈みたる、人氣なき庭にはあれど、背戸ごとに柿の実も
 見ゆ。裏丘へのぼる小径こみちは孟宗の林に見えて、その藪の上の日向
 に蜜柑もぐ人もよく見ゆ。声高にさては語りて燧石切ひうちる荻たばこび火も
 見ゆ。珍らかにいとど澄めばか、遠近の枯葉のくぬぎ、草もみぢ、
 耀く薄、おしなべてかくて安やすけし。あなあはれ、ここの丘窪、明

るけど古さび棚田、うれしけど冬の日棚田、その空に翔る群禽、
 鶺鴒の薄黄の尾羽のただ波うちて影もとまらず、影もとまらず。

荒浪千鳥

磯長の小ゆるぎの浜、この浜や荒浪高し。この夜ごろいよいよ
 高し。時化つづき西風強く、夜は絶えて漁火すら見ね、をりをり
 に雨さへ走り、稲妻の青の映りに、鍵形の火の枝の棘ひりひり
 と鋭き光なす。其ただちとどろく巻波。時として雹さへ飛ぶに、
 なにぞ何ぞ乱るる鳥は。なにぞ何ぞ散り散る鳥は。目に見れば数

かぎりなく、声きけば消けなば消けぬかに、へうへうと連れ啼く鳥の、
 百千鳥、荒浪千鳥。荒浪の穂立ほだちの空を、とまるすべ、寝ぬるすべ知
 らに、ただ飛びて散り散る千鳥。此海や涯はてし知られね、この荒れ
 や測り知られね、初夜しよや過ぎて、また後夜ごやかけて、闇ふかく翼はねふる
 千鳥、この雨を、また稻妻を、ひた濡れて乱るる千鳥。ある声は
 遠くはぐれて、ある群は千鳥型がたして、また或あるは陸くがの方向き、ま
 た或あるはちりちりと散り、すれすれに或あるは落ちつつ、波の上驚
 きて飛び、時に消え、時に明り、いよいよに暗く恐れて、いよいよ
 よに青さをに染そまりて、時わかず連れ啼く千鳥、へうへうと凍こごゆる千
 鳥。いつまでか全またく迷ふぞ、いつまでか飛びてやまぬぞ。

磯長しながの小ゆるぎの荒浪千鳥。荒浪の天そらうつ波の逆まきのとどろ

きが上、あああはれ、また向き向きに、稲妻の青さをの脅おびえに連れ連れ乱る。啼き連れ乱る。

落葉行

ひとりゆくこの山やま岨そは落葉のみ溜りしめ湿れり。落葉踏みつつ行けば、いづく飛び鶉高音うつ。かさこそり、櫟くぬぎの枯葉わがかたへまた声立てぬ。日おもての草くさが崖けす薄つき、その穂にも落葉かかれり。草紅葉まだ温ぬくけれど、その上へにも落葉うごけり。向ひ山、こなたの小丘、見るものはみな枯木のみ。空ぐるま軋るを見れば、上う

岨はそぼを尻毛振る赤馬あか、ひようひようと吹かれゆく馬子、みな寒き
 冬のものなり。溪への上の小茶屋の椅子も紅葉積み、その溪かけて、
 はらはらと落葉ちりゆく。山窪の幾むら藁屋、水ぐるま廻まはれる見
 れば、ほとほとに水も痩せたり。樗原ばらただ目に寒く、入りゆけば
 陽ひの目薄きに、雨のごとちる落葉あり。よく見ればいよいよ繁し。
 声立てていよいよ寂さびし。ほうほうと立てる雑木の岨路そぼぢゆき、別れ
 径みちゆき、当処あてどさへ果てはわかねど、風のまま歩みのままに、行き
 行けばただ落葉なり。前うしろただ落葉なり、かさこそと、また、
 はらはらと、空にも地にも声ばかりして。

落葉吟

かうかうと照る月ながら、雨のごと飛ぶ落葉かな。ああ落葉、
 その影見れば、秋も早や老いにたるらし。ああ落葉、その声きけ
 ば、おのづから冬か待たるる。身の老おいといふにはあらね、おのれ
 また若しともなし。さやけさはかかる夜ながら、見の恍ほれむ光に
 あらず。杉木立青きはあれど、隣となり山やま早やも痩せたり。枯れ枯
 れの木の枝えを透きて、月はただ遠くあらはに、落葉また風に吹か
 れて、へうへうとかぎりも知らず。いつの日かまたと還らむ、い
 つの世か久しかりちふ。これやこの常なかる世に年月の移らふま
 にま、我はあり、我はあれども、いつ知らず後あとべのみ見る。なほ

なほも先きぞ氣遠き。而かもなほ過ちにけり。つくづくと耻ぢ泣
 きにけり。さりとは諦めも得ず、また和の悟りをも見ね、ただ
 すこしおのれ知るからただ堪へて遜へりくだるのみ。ややややかにかくてあ
 るまで。寂しがり寂しがるなる。ほとほとに堪へは得ぬとも、こ
 の寂びや、身もて得し寂び、せめて者まだ頼りなる、ただたのみ
 ただ守るべき。ただひとり物も思はむ。さてひとり歩み歩まむ。
 あはれなる末の末かも、飛びちらふ落葉なるべき。落葉なら風の
 まかせよ。照る月に、北山風に、夜あらしに、影は影とし、はら
 はらと、ただ、はらはらと声ばかりせよ。

おらもまたあなたまかせぞ一茶坊

水仙と菊

窓掛の絹きぬ寒冷紗かんれいしや、硝子扉どの外そとの短か日、短か日の斜の陽ざし。窓掛の絹寒冷紗、其蔭の水仙と菊、鉢台の薄玻璃の壺。今朝咲きし一重水仙、いつの日か挿しし寒菊。冷たくて白き水仙、ややぬく温く黄なる寒菊。水仙の青さをの葉は張り、寒菊の葉は半ば枯る。水仙は水仙の影、寒菊は寒菊の影、その壺も玻璃の影して、栗色の砂壁に在り。硝子透き、窓掛を透き、斜め陽びの明あかるみぎりは冬もなほいつくしく見ゆ、たより頼無き影としもなし、柔かく親しかりけ

薄玻璃の影もゆらげり。妻とある二階の書齋、午過ぎはただ
 閑しづかなり。湯沸のふき立つる湯気、わがふかす煙草のけむり、ま
 た揺れてその壁にあり。妻の影、わが影もあり。水仙と寒菊の花、
 現身まよめに正眼まよめに見れば、まこと今あはれなりけり。水仙と寒菊の影、
 現うつなく映らふ観れば現なし、寂さびしかりけり。近々と啼き翔る鶉、
 遠々とひびく浪の音と。誰か世を常なしと云ふ、久しとも愛かなしとも
 思もへ。山に住み世さかに離るとも、全またく世を厭ふにあらず、五月蠅うるさや
 と切せちに思へど、人来ねばたづきも知らず、妻と我、二人居れども、
 かくてあれども、時をりはただ寂しくて眼を見合せぬ。

竹林の早春

わが庵の竹の林にこぬか雨今朝も湿れり。春さきのこぬか雨な
 り。ふるとしも見えぬ雨なり。こぬか雨笹にこもりて、香焼かうたけば
 香かうもしめりて、事もなし、ただ明るけし。こまごまと濡れかかる
 のみ、漂渺と煙曳くのみ。しづかなり、唯安らなり。顔出してつ
 くづく居みれば、笹子啼き、目白寄り来る、笹葉揺り揺りて又去る。
 散りたる去年こぞの枯葉も寂しけど寒しとも無み、何かしら萌ゆる緑
 の春は早や竹の根にあり。よき湿しめりかくて湿らば、竹煮草、葛、
 蔦の臺やややにすすろき出でむ。髭長の藪の菫、堇など、や
 がて咲くべし。松風の声は沈めど、常ならぬわびしさならず。裏うら

岨らそてばののぼりくだりに、ほつほつと通る馬さへ時をりは青きつけ
 つつ、声こはだか高の人の話も濡れながら行けば親しき。静こころ香かうを
 つぎつつ、さて、今日もうら安くこそ。こぬか雨ふるがごとくに、
 こまごまといつくしみてむ、春さきの我の思を。

元旦の夜のこと

あな踈忽そこつ、吐息といきいでたり。気にかけて、何といふ事もあらぬを。
 また妻よ、焙ほうじてむ玄米の茶を。来む春の話、水仙の話、やがて
 生れむ子のことなども話してむ。元旦のこの夜の深さ。山住の我

らなるゆゑ、いついつとかはりは無けど、今日はまたとりわけて、とりわけてよろしかりけり。全く今しづかなりけり。今さらに何をかや云ふ。この夜さのこの安けさは神ぞただ守りますべき。心ゆくうれしさの中、我は唯詩を思ふなる、汝みましまた差しのぞくなる。しづかなり、ただあはれなり。筆動く音のみぞする。身じろきの息のみぞする。さてあらば夜も明けぬべし。あれ聴けよ、鶏啼とりくらしき。また聴けよ浪の音なる。二人ただかくて起きゐて、まこと今ただ二人なる。二人なるいのちの息のおのづから触れかよふかな。親しくもゆき通ふかな。蜜柑など一つむきてむ。近々と火にむかひるむ。またすこし炭つき足して、さて待たむ。二日の朝の海原の紅き日の出を。

蒨の臺

新らしき蒨の臺かな。珍らしき^{にが}苦き^か香ぞする。その蒨の臺一つ刺し、二つ刺し、竹の小串に三つ刺して、さて味噌つけて、火に焼きて、あな苦さよと一つ食べ、あなうまさよと二つ食べ、あないつくしと三つ食べて、さてさびしやと我るたり。春さきの夜のあは雪の消^けなば消^けぬかの声聴きてけり。そのしばらくは。

聴けよ妻ふるもののあり

聴けよ、妻、ふるもののあり。かすかにもふるもののあり。初夜過ぎて夜の幽かすけさとやなりけらし、ふりいでにけり。何かしらふりいでにけり。声のして、ふりまさるなり。雨ならし。いな、雪ならし。雪なりし。雪ならば初はつの雪なる。よくふりぬ。さてもめづらにふる雪のよくこそはふれ、ふりいでにけれ。さらさらとまた音たてて、しづかなり。ただ深むなり。聴けよ、妻、そのふる雪の満ち満ちて、ただこの闇に舞ひ深むなり、ふりつもるなり。

たまさかに浪の音する夜の雪なり

ころころ蛙の歌

春さきのころころ蛙、一つ鳴き二つ鳴き、ころころと後続^{あと}け鳴
 き、ふと鳴き止み、くぐみ鳴き、また急に湧^わきかへり鳴く。いよ
 いよに声^{あは}合せ鳴く。近き田のころころ蛙、よく聴けば声変り鳴く。
 声変り一つ一つに、あなをかし、鳴けるさま見ゆ。あちら向きこ
 ちら向き、飛び飛びで、また水くぐり、うちひそみ、頬をふくら
 かし、鳴き鳴ける咽喉のさま見ゆ。あなをかし近田の蛙。さみど
 りの根芹^{しめ}が湿^{ぬり}る、塗^{ぬり}畔^{あぜ}かまだ新らしき。雨もよい雨よぶ声の寒

けども寒しともなし、寂しけどなにか笑へり。友よびてまた鳴く蛙遠田にも遥かどよもす。あなあはれ遠田の蛙、また聴けば遠く隔てて、夜の闇の瀬の音隔てて、いや離りうち霞み鳴く。また寄せて近まさり鳴く。遠つ浪辺に寄すること、遠つ風吹き寄すること、その声は夜空つたひて、いよいよ近く響きて、さて絶えて、また続け鳴く。近き田もまた競ひ湧く。初夜過ぎてまた後夜ふけて、なほなほにどよもす声の、おそらくは夜の明くるまで。萌黄月、月の円暈まろがさ、遠近の薄き飛び雲、濡れ濡れてちらめく星の糠星のかげ白むまで。ころころとまたころころと、夜もすがら、夜をただ一夜、春さきのをさな蛙が、声かぎり、また声かぎりこころなく鳴くも。

青空文庫情報

底本：「白秋全集 8」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日発行

底本の親本：「大観 二月號 大隈侯哀悼號 第五卷第貳號」實業之日本社

1922（大正11）年2月1日発行

初出：「大観 二月號 大隈侯哀悼號 第五卷第貳號」實業之日本社

1922（大正11）年2月1日発行

入力：フクポー

校正：岡村和彦

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

観想の時

——長歌体詩篇二十一——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 北原白秋

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>